

## はじめに

豊かな社会の実現、情報化の進展など時代の変化の中で、家族や親子の関係、子どもたちの生活も随分変わってきた。「子どもと大人」「子どもと地域社会」など、本来であれば、つながっていたり、重なっていたものにスキマが生じたりしており、それらを結ぶ人や場が少なくなっただけでなく、大きな課題である。私たち大人は、子どもや若者たちと社会をつなぐ結び手となり、次世代と大人との信頼関係を取り戻していかなければならないのではないだろうか。

二〇二〇年の子どもたちが、あるいは子どもたちを育む家族や学校、地域がどうなっているか、それを予想することなどできない。ただ、現在の子どもたちと子どもたちを取り巻

## これからの子どもたちのために

狭間 恵三子 *Written by Emiko Hazama*

く環境が抱える課題を考えることで、未来の子どもたちにとって少しでも良い方向に進んでほしいと願う。

私が所属していたサントリー次世代研究所（二〇〇八年三月活動終了）は、平成元年に設立されたサントリー不流行研究所の流れを汲み、二〇〇五年より子どもと若者をめぐる問題にテーマを絞り、「子ども自身」「子どもを育む家庭」「次世代を取り巻く社会」について調査・研究を行ってきた。

子どもの健全な育ちに大きな役割を担う家族については、一九九九年～二〇〇〇年に「家族に関する国際調査」、二〇〇五年～〇六年にかけて「現代親子調査」、そして二〇〇七年には「子育て家族の食卓調査」を行った。豊かな中に生まれ、「我慢」や「努力」の必要がない時代に、親がいかに子どもを導き自立させていくのか。

まずは、それらの調査の中から見えてきた現代の家族や子ども姿を映し出し、現代の子育て世代ならではの特徴や課題を考えてみたい。

## 横並びの親子関係

「何でも話せる友達のような親になりたい」二〇〇五年、「現代親子調査」と題して、首都圏在住の小学四年～中学三年生までの子ども

とその両親、計七四三家庭にアンケート調査を行った際、父親、母親が答えてくれた中で最も多い「理想の親像」である。

母親は子どもの年齢に関係なく、「友達のように何でも話せる母親」「どんなことでも相談できる優しい存在」でありたいと願っている。一方、父親は、子どもの年齢によって理想像が異なる。小学生の父親は、「家族に頼りにされる父親」「子どもに尊敬される父親」でありたいと、一家の大黒柱的存在であることを理想としている。ところが中学生の父親は、「何でも話しあえる友人的な親」「子どもの相談に乗ってやれる優しい父親」というように、横並びの関係志向する。思春期の難しい時期の子どもには、対等な関係で寄り添ってほしいこととされているようだ。

子どもの話によく耳を傾け、理解ある親でいたいと思うからだろうか、調査結果からは、親が子どもの意向に沿う傾向がうかがえる。例えば、子どもが高額なものを欲しがったとき、断固として買わないという親はほとんどない。八割程度は買いつけてあげている。中学生ともなれば、友達とのつきあいに携帯電話が必要だと子どもにねだられ、六割は持たせている。「お母さんも持っているのに、なぜ私はためなのかと聞かれたら答えに困る」と親は言う。

また女の子は、早くからお化粧や髪染めなどに興味を持ち、小学生女子の三〇・五%、中学生女子の三九・八%が「お化粧をした、しよつとしたことがある」と答えている。そんなと

き、親の対処で多いのが「学校が休みのときだけならいい」と許可することで、三四・八%にのぼる。「絶対だめだと叱った」という親は、わずか二・二%である。「学校が休みならいい」というのは、校則違反を気にしているだけで、行為そのものを禁止しているわけではない。子どものほうは、お化粧をしたり髪を染めたりしても、「親からは特に何も言われなかった」と答えている子が多い。絶対だめだと強く言われなければ、親は注意をしたつもりでも、子どもは親が反対しているとは受け止めていないようだ。

一九九九年～二〇〇〇年にかけて、アメリカ、イギリス、フランス、イタリア、スウェーデン、韓国、タイの七カ国を対象に、家庭や教育に関する調査を行った際、欧米では守るべき子ども時代と自立すべき年齢とを分け、親のふるまいも明確に切り替えていたのが印象的だった。子どもが小さいときにはかなり厳しいしつけがなされ、子どもの自由はむしろ日本よりも少ないくらいだ。親は子どもが観るテレビや聞くCD、就寝時間など、細かいところにも目を行き届かせ、年齢に合った情報を与え、家の決まりを納得させる。家庭は自立したときに必要なルールやマナーを教える場であり、それを教えるのは親の責任だという姿勢が顕著であった。日本のほうが小さいころから自由を許し、子どもの意向を受け入れる傾向が強い。

現代親子調査では、親子共通の趣味についても聞いてみた。「子どもと共通の趣味がある」

という母親は六一・三%、父親は五三・五%である。気になったのは、子どもと共通の趣味がある父親は、休日には「子どもと過ごす時間」を優先しているが、共通の趣味がない父親は「自分の時間」を優先する傾向にあることだ。共通の趣味がないと、子どもと一緒の時間を上手く過ごせないということだろうか。楽しい、心地よい時間ならば共有したいということかもしれない。

アンケート調査を実施する前に行った親へのインタビュー調査でも、「私と子ども二人はジャニーズが大好き！毎年一緒にコンサートに行きます」「中学三年生の娘が可愛くてしかたがない。今でも手をつないで遊びに行く。カラオケも一緒」といった、仲の良い親子関係を強調する人が多かった。

親子一緒に過ごす時間を楽しいと言っている一方、子どもの声で気になるのが、「悩み事や困ったことがあると誰に相談するか」という質問に、小学生の一七・八%、中学生の二一・二%が「誰にも相談しない」と答えていることだ。中学三年生では三割の子どもが困ったことがあっても誰にも相談しないと答えている。また、「親はあなたの意見や考え方を聞いてくれるか」「親は困ったときに相談に乗ってくれるか」という問いに対して、中学生、特に男子は「あてはまる」と答えた子どもが少ない。親たちは「何でも話しあえる存在」でいたいと願っているが、どうも子どもたちは、困ったことや悩み事といった深刻な話はあまり受け止めてもらえないと思っていないようである。

いつも仲良しで、楽しい友達親子。

だからこそ、子どもたちは平和な空気を壊すかもしれないネガティブな話をしにくいのかもかもしれない。親子で楽しい時間を共有し、心地よい関係を保つただけでなく、親として子どもが抱える悩み事や葛藤に、どう気付いて、しんどい話にも向き合っていくのか。調査の結果は、一見平和な親子関係の中にも、見えていない課題があると語りかけているようだ。

### 気遣う子どもたち

子どもたちは、友達との関係でも、とても気を遣っている様子がうかがえる。前述のアンケート調査では、子どもたちに友達との関係のことも聞いてみた。小学生、中学生ともに友達の数は多く、「友達といるのが楽しい」「今の友達関係に満足している」という子が九割を超えらる。

しかし、「友達には嫌なことや悩みを相談したり何でも話せる」子は七割を切る。男子だけ見ると半数近くが「嫌なことや悩みは話さない」。また、「自分が話をするより友達の話を聞く」(七十二・七%)ようにしており、「友達に話を合わせ、いやがることは言わないよう気をつける」(六九・一%)と言った。友達とは、仲良く楽しい関係を築いてはいるものの、いやがる話を避けたり、自分のことを言いつぎたり

しないように、小学生時代から気を遣っているようだ。

友達はどんな人が聞いてみると、「おもしろい」が一位。次いで「趣味や興味が同じで気が合う」が続く。一方、自分は友達やまわりの人からどんな人だと思われたいかという質問の一位も「おもしろい」。子どもたちに好きなテレビ番組を聞くと、お笑いタレントが多く出演しているバラエティ番組が挙がり、好きな芸能人も、格好いいアイドルよりもお笑いタレントが多い。身近な友達関係も、テレビの中の世界も、何より「おもしろい」ことが重視されているのだ。

友達との話題は、「学校での行事やできごと」(二二・四%)、「趣味やクラブ活動のこと」(一六・三%)、「テレビ番組、タレントのこと」(一五・四%)が多く、「悩みや困っていること」(二一・六%)、「将来のこと」(一〇・三%)などは、ほんのわずかである。深刻になるような話はせず、楽しくつきあっている様子がうかがいあがる。

友達関係に満足していると言っても、悩みがないわけではない。子どもたちに「友達についての悩みはありますか」と尋ねると、「悩みがある」と答えた小・中学生男子が九%、同女子が二八・八%で、女子に「悩みがある」と答えた子が多い。

何に悩んでいるのかというと、最も多いのは、「グループの友達関係がややこしい」友達なのに上下関係があり、強い人には意見を言えずいつもビクビクしている、「いつ嫌われるか不安」といったグループ内での人間関係に

ついでの悩みだ。男女とも、学校ではグループで行動するという子が八割を超え、特に中学生女子は、「いつも決まったグループで行動する」割合が高い。固定した仲間であることが多いうえに、そこからはじかれることに、ことさら敏感になってしまうのだらう。

関係が壊れることを恐れながらつきあう子どもたち。グループは自分を守ってくれるシエルターだが、一方で自分を傷つける可能性も持っている。「いじめ」の問題もあるからか、



現在の子どもたちは友達との関係が、とにかく「おもしろく」「平穩で」「あるように氣遣っているようだ。」

今の子どもたちは、無邪気に本音を吐き、それゆえにときにはぶつかり合ってしまう、という体験が少なくなっているのかもしれない。せめて親子の間だけでも、言いたいことを言い、ときには喧嘩しながら理解しあっていきといった生身の間関係を積み重ねていきたいものだ。

### 閉じていく家族

「現代親子調査」の結果からは、子どもの世界がとても狭く同質化していることがわかる。日常生活の中で話をする大人は、ほとんど親と先生のみ。異年齢の子と遊ぶ機会もあまりない。もちろん子どもが育つ上で親と先生は大切な存在だが、直截的な関係だけに、それだけだと息が詰まってしまうだろう。もう少し力を抜いて話ができる大人や兄貴分的な存在が必要ではないだろうか。「約束せずに友達の家遊びに行くことがあるか」という



問いには、九割の子どもたちが「あまりない」または「まったくなく」と答えている。子どもたちも塾や習い事で忙しく、今や小学生といえども事前の約束は必須。母親たちに聞くと、事前のお約束は、子どもがまだほんの幼児のころからの決まりだったようだ。母親たちの間には、「友達の家遊びに行くときはお菓子を持たせる」「いつも同じ子の家に遊びに行かないよう配慮する」など、暗黙の了解事項があり、そこから外れることをとても気にしている。子どもが無邪気に友達の家遊びに行きたいと言っても、「お約束がないとだめ」「何度と同じ子の家に行ってはだめ」と母親が止めてしまうのだ。そうしてアポイントをとってから遊びに行くということを、ほんの小さな

ころから身につけていく。大人の世界の約束事がそのまま子どもたちに投影されているのだ。安全の問題もあって、今や公園に行けば誰かがいて一緒に遊べるということも少なくなつた。約束をして遊ぶことが悪いわけではないが、もう少し自由に子どもたちが行き来できる遊び場が地域の中に欲しいものである。

小学生から高校生までの子どもがいる全国六〇〇家庭を対象に行った「現代家庭の食卓調査」(二〇〇七年)では、家庭の食卓がほとんど家族内に閉じられており、あまり家族の外に開かれていない様子がうかがえた。自宅に友人や親戚を呼んで食事をともにしたことが「ここ一年以上ない」という家庭が半数に達し、友人や親戚の家で食事をともにしたこと、年に一度あるかないか、といった程度である。

日常生活の中で、子どもが友達の家で食事をこちそうになった、あるいは子どもの友達も一緒に自宅で食べた、といった機会も「まったくなく」「あまりない」が大半を占める。他家での食事の機会というのは、子どもにとっても新しい食との出会いや、マナーを学ぶきっかけ、あるいは普段接しない大人と話す機会にもなると思うのだが、なかなかそのような場はないようだ。友達の家に行くときはお菓子を持参することが了解事項といった関係の中で、食事をこちそうになるなど、お互いの負担感が増すだけなのかもしれない。

しかし、人にとって「食べる」ということは、単に生命を維持するためのものではなく、食

をきっかけに人が出会い、つながり、次の世代を育てていくものだ。家庭の食卓は、家族をつなぎ、子どもたちに食文化を伝えることで世代をつないでいく。あるいは親族や友人など、食卓を囲みながら交流の機会を持ち、家族と社会がつながっていきつきかけにもなる。そういう意味では、「食」がもう少し気楽に、人と人が交流するきっかけになってほしいものである。

これからの子どもたちのために



現代の家族・子どもを対象に調査を実施してみると、親子関係、子どもの遊びや学び、「コミュニケーション」、そして家庭の食卓など、すべてがとても狭い範囲に閉じてもっているように感じられる。子どもたちは、狭い友達関係の中で、人間関係に気遣い、母親たちも親仲間とのバランスに気を遣う。親子の間でさえ楽しい雰囲気壊さないように気をつけている。

また、教育熱心な親と子ども任せの親に二極化している状況もうかがえた。

小学生の四割が就学前から習い事を始めているなど、ほんの幼いころから勉強や習い事などに熱心な親が

いる一方で、子どもの教育環境にあまり関心がないという親も半数近くいる。

子どもはいつか自立し、自分の足で立って生きていかななくてはならない。しかし、自立する力をつけるまでは、親や先生、あるいは周囲の大人たちや社会に育まれる存在である。家庭の中だけでは守れないかもしれない子どもの育ちをどう確保していくか。学校や地域も含めて大人たちが考えていかなければならない課題ではないだろうか。

もう少し、肩の力を抜いて、無理のない範囲で助け合いながら、地域や社会の広がりの中



で子どもたちを育てていくという視点を持ちたいものである。子どもが親や先生だけでなく大人と出会い、年齢の違う仲間と出会い、そして自分の家庭とは違う文化とも出会いながら育っていくことは、きっとプラスになっていくに違いない。

これからの社会を担っていく子どもたちには、多様な価値観の中で豊かな人間関係を築いていくための「コミュニケーション力」、自分の将来を選択する力、そして「公」を考える力を身につけていってほしいと思う。

「コミュニケーション」とは、自分を理解してもらつことではなく、相手を理解することである」と聞いたことがある。まず他者を理解すること、それでこそ自分も理解してもらえらる。そのためにも、想像力も不可欠だ。

若者たちのワークスタイルについての調査で、若い弟子たちを育てている仏師に取材をしたことがある。住み込みで弟子入りしようという若者たちを頼もしく思いつつも、「今の若い人たちは共同作業ができない」と嘆いておられた。みんなで力を合わせて重い古木を運んでいる最中に突然手を放してしまう若者がいる。途端に全体のバランスが崩れてしまう。どつして「ちょっと止まってくれ」と一叫べかけられないのか。自分だけが手を放したらどうなるか、容易に想像できると思うのだが……と師は首をかしげる。社会に出て一人でできる仕事はない。仕事において次の工程を想像する力が欲しいものだ。

多様な価値観を許容し、自分の価値観や生

活スタイルとは異なった人々と協働していくことができる力も持ってほしい。そのためには、同じ価値観や趣味を持った同質の仲間とだけ過ごすのではなく、子どもたちが、できる限りいろいろな子どもや大人と出会い、さまざまな考え方や価値観に接する機会が大切だ。自分の考えを述べ、他人の意見に耳を傾け、対話の中で自分も相手も視野を広げながら、課題を解決していく。そのようなグループワークの機会を学校教育などでも、もっと増やしていく必要があるかもしれない。

自分は社会の中で、どのような役割を果たしていきたいのか、自分の将来を考え、それを選択していく力もつけていきたい。社会は豊かになり、人生の選択肢は広がっている。進学も就職も結婚も自分で自由に選ぶことができる。しかし、選択肢は増えたけれども、選択する力がないと、迷い続けるばかりになってしまう。

これからの社会は、行政に生活の基盤すべてを頼るのではなく、私たち一人ひとりが自

ら参画して社会を支え構築していくという発想の転換が必要になっていくだろう。自立した市民が、社会を支える側に立ち、主役になって新しい時代をつくっていく。すでに、地域づくりや文化、福祉、教育、環境など、さまざまな分野で、行政や企業が対応しきれない面を埋めるNPOなども数多く登場してきている。「社会起業家」として活躍する若い人たちも増えており、頼もしい限りだ。社会と個人の新しい関係をつくり出していくためにも、子どもたちから、地域の中で育まれ、地域に愛されながら、自分たちも何かの役割を果たしていく、といった体験を積み重ねていきたいものだ。

日本の子どもたちは自尊心が低いといった調査結果もさまざまとこころで見られる。高い自尊心を持つためには、何よりも幼いころから、親をはじめとした信頼できる大人たちに愛されているという実感が必要だ。加えて、ただ守られ続けているだけでなく、成長する過程の中で、自らの存在もまた、何か

の、誰かの役に立っているという体験が必要だと思つ。

現在の子どもたちも、そして二〇二〇年の子どもたちも、自分とは異なる多くの他者と出会い、豊かな自然と出会い、地域の暮らしの中で、人や、自然や、社会とさまざまな関係を紡ぎながら育ってほしいものである。

CEL

狭間 恵三子（はさま・えみこ）

（財）大阪観光コンベンション協会経営企画部総務チーム情報発信担当部長。一九八二年サントリー株式会社入社。人事部、広報部を経て、サントリー不況研究所（後にサントリー次世代研究所）勤務。二〇〇八年より現職。研究所時代の主な研究テーマは、家族関係・親子関係の調査、子どもの育ちや環境、現代理者の価値観・ライフスタイルなど。主な著書は、『時代の気分』、『世代の気分』、私がえりの時代に、『共著、NHK出版』、『変わる盛り場』、『私』、『遊びの街』、『共著、学芸出版社』など。